

古文書から見た 幕末のコレラ — コロナ禍に遭遇して —

服部 瑛 著



みやま文庫

まえがき

このところコロナウイルスのパンデミック（全世界的）な流行が世の中を騒然とさせている。なんと理不尽な、と思っている方もいらっしゃるかもしれない。しかし疫病は太古の昔から連綿と人類を苦しめてきた。一千年以上前の史書『続日本紀』を見ると頻繁に疫病が出てくるし、富士川游『日本疾病史』という大著では七世紀からの疫病が克明に記録されている。そう考えると私たちは、疫病から生き残れたそれこそ幸運な先祖の子孫であることをまず感謝しなければならぬ。疫病とは伝染病のことで、麻疹（はしか）や痘瘡（天然痘）などがよく知られているが、最近ではインフルエンザが定期的に私たちを苦しめている。この理不尽な伝染病の原因がわずかながらわかり始めたのが明治一〇年代の細菌の発見だったから、それまで果てしもなく長い間、人類は暗黒の世界といった状態でこの厄介な病気に立ち向かわねばならなかったのである。

歴史上疫病のパンデミックな流行は、幕末安政五・六年の暴瀉病（コレラ）が特筆される。当時コレラで多大な犠牲があったのだが、その暗澹たる状況下でも、当時の人たちは古文書の中にその記録をしっかりと残しておいてくれた。その事実は、誰かが読まないと現代に戻せない。そこには、驚きや警戒、恐れや不安、増悪や怨嗟、苦痛や絶望、嘆きや悲しみ、あるいは一命を取

りとめた喜びや安堵などあらゆる感情がつぶさに記されていて切々と迫ってくる。

群馬県には、松島榮治先生という歴史学の大家がおられる。十年程前、松島先生に不躰に「古文書を教えてくれる人はいませんか」とお願いしたことがあった。しばらくして、「なかなか適当な先生はいません。直に古文書を読んでみたらいかがですか」と「上原家所蔵文書目録」を持ってきてくださったのである。刮目するとはこんなことをいうのだろうか。その中から暴瀉病という病名が私の眼に一直線に飛び込んだのである。私の古文書との最初の出会いだった。

そして、コロナウイルスのパンデミックな流行に出会った！

まさか生きているうちにパンデミックな流行に出会おうとは夢にも思わなかった。それは今まではるか遠くにあつて客観的に眺めていたものが、すぐ間近に主観的に強烈に迫ってきたというまさに驚天動地の世界だった。

さて医師として一体何をなすべきだろうか？ 思い立ったのは、古文書を通して当時の状況を正しく残し、かつ多くのひとに知っていただきたいということだった。そのきっかけを与えてくれたのが、最初に出会った上原元伯の『暴瀉病二付』という古文書だった。今から考えると実に不思議なことだがその後、古文書『安政記聞』の中にもコレラの記事を見つけ、「倉賀野神社」、

「赤城神社」、玉村宿の『三右衛門日記』、各県の『県史』の中などにもコレラを見つけたことができた。今回その出会いに目を向け、それぞれ一つずつ物語として紹介する作業を思い立ったのである。

本書は、読者に幕末安政時代のコレラの流行の実際について古文書を通して点検、体験していただく試みなのだが、現代語訳（大意）は、紙幅の都合上、一部だけになってしまったことをお赦し願いたい。それに代わって大筋が理解できるように要約的な試みを行なった。できることならば同時に原文を読んでいただいて、当時の雰囲気や緊張感といったものを感じとっていただければ幸いである。残念ながらそこに記された状況や気配は決して楽しいものではないが、コロナウイルス（COVID-19）が跋扈している今ならば当時の状況を正しく理解していただけるのではないかと考えている。私の拙い古文書の旅にお付き合い願いたい。

本書を書くにあたって左記のことに留意した。

- 一、翻刻文は実際読んだものは太字とした。但し引用したものはその限りでない。
- 一、月日の記載は旧暦である。

一、実際に古文書を読んでいただきたいという理由から、史料の引用にあたっては、旧漢字は原則として新字体にした（例 國↓国）。またカタカナはひらがなに変換し、さらに「二而」

↓にて、「左」↓より、「之」↓の、「江」↓へ、「者」↓は、「歟」↓かと改め、歴史的仮名づかいは現代仮名づかいにした。古文書を理解しやすいように区切れると思われるところに句読点を打ち、難字には適宜、振り仮名を補った。さらに、「本草綱目沙虫集解」と区切りがはっきりしないところは一マス開けて、本草綱目 沙虫集解とした。

一、和数字に関しては、例えば21は、二十一ではなく二一としたが、引用した文章ではそのまま表記した。

一、古文書の翻刻文の前に予備知識、後には解説を加えた。さらに追加や補足が必要なところには**補足メモ**あるいは**コラム**というコーナーを作って理解しやすいように心掛けた。古文書は一見難解に見えるが、繰り返し読んでみると大まかには理解できるようになり、当時の状況が浮かび上がってくるので可能な限り古文書に接していただきたい。

一、漢方医学に関しては、私が門外漢であること、あるいは本書の意図にはそぐわないため必要最小限にとどめたことをお赦し願いたい。

註

表表紙と裏表紙の絵図は『日本常民生活絵引』第四卷（六三四）からとったもので、絵巻物『春日権現験記』に収められている一部を、歴史学者濫澤敬三（渋沢栄一の孫）のもとで、画家で民俗学者である橋浦泰雄氏が複写したものである。表表紙の中央に吐いている男が描かれ、それを疫鬼が覗いていて、あたかもコレラを思わせる絵図となっている。裏表紙の仰向けに寝ている人物は「瀕死の病人」とあった。

目次

はじめに

第一章 上原元伯『暴瀉病二付』	3
補足メモ■上原元伯について	5
一、コレラの病状	5
補足メモ■コレラについて	8
二、コレラを中国の医書で検索	10
三、コレラの漢方医学からの解釈	12
四、モリスの『医学韻府』	14
五、原因あるいは悪化要因	15
六、上原元伯の見解	17
七、西洋医学のコレラの治療法と元伯の結論	19
八、まとめ	21